

シリアにおける農業普及ならびに普及員訓練

第6回 農業普及と普及員訓練の今後～言い古された問題点と普及の今後について～

近年の途上国援助における事業(プロジェクト)のソフト化の流れの中で、農業・農村開発の分野においては普及や普及員訓練が非常に重要なテーマとなってきている。しかし同時に、普及員の能力不足や普及活動に必要な施設・資機材の不備、普及と試験研究との連携の脆弱さ等々、すでに「言い古された問題点」とも言えるこれらの点は、シリアを含む多くの途上国で依然として改善されてはいない。最終回にあたって、これらの問題点に対する具体的かつ効果的な改善策はあるのか？ という点について考えてみたい。

まず、現在の普及員制度そのものに問題はないのか？ はたして旧来の普及員制度は今後も有効に機能するのか？ いつまでも同じような問題点が指摘され続けるということは、その方法自体が誤っているのではないのか？ 例えばシリアの普及員制度を見ると、普及員の数は全国で 5,000 人以上にのぼり、「組織」としても一見整っているように思える。しかし、現実はどうか？ この組織がうまく機能するためには、いくつかの実現不可能な前提条件の上に立って、「もし、〇〇の条件が満たされれば・・・」というような「ないものねだり」あるいは「絵に描いた餅」のような状態ではないのだろうか？ それでは、現実的かつ具体的な解決策はあるのか？ いくつか考えてみる。

1) 普及員の二極化(Specialist と Generalist)

確かな技術を持って農家や一般普及員をリードする上級普及員(SMS=Subject Matter Specialist)と、特殊技術よりは全般的知識を持つ「村おこしのコーディネーター」的な一般普及員(Generalist)、というように普及員を二極化させ、そのために必要なトレーニングをそれぞれに行う。普及員の能力不足が問題とされているが、すべての普及員に同じ研修をするのではなく、まず各普及員の実力と研修ニーズの的確な把握を行い、必要とされる「能力」に関する研修を実施する、というのが現実的な対応である。

2) 地域の篤農家に学ぶ(Farmer-to-Farmer Extension)

農民は一般的に「保守的」で、従来のやり方を変えたり、新しいことを試すのに慎重である。しかし、その方法が彼らに利益をもたらすことがはっきりすれば、強制されなくても取り入れていく。特に、農民自身が自分で試してうまくいったやり方は、他の農民もまねをしやすい。それは、实际的であり、教科書的ではない技術であって、難解な専門用語はいらない。学ぶべき技術は、実はすでにそこに存在するのである。そして往々にしてこうした技術や情報は口コミで伝わっていく。よく普及活動の妨げの「言い訳」の理由にされる、「バイクがないこと」が問題ならば、「バイク」によらない情報(技術)伝達の方法を取り入れるべきである。

3) 普及サービスの有料化(Privatization あるいは Incentive)

普及活動のための資機材が不十分であることに加えて、給料が安いことは多くの途上国で普及員の不満として聞かれる。公共サービスとしての「普及事業」は無料が原則であるが、普及員としての能力・技術が金銭収入につながるようなシステムは考えられないだろうか。シリアではほとんどの役人がセカンドジョブ(副業)を持っていて、たとえば灌漑局では昼間は職員として働き、夕方は灌漑関連のコンサルタントをして灌漑施設の設計や技術的アドバイスをしている例もある。このように、技術者としての能力を向上させることが金銭収入につながれば普及員の Incentive になり得るし、ひいては実際に農家に役立つような技術の開発や提供も可能となる。



農民対象の研修(シリア)



篤農家から学ぶ(ジンバブエ)



PRAによる調査(ラオス)